

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-11-10

フィリピン, インドネシア, エイズ事情

中島, 成久

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 社会科学編 / 法政大学教養部紀要. 社会科学編

(巻 / Volume)

79

(開始ページ / Start Page)

23

(終了ページ / End Page)

42

(発行年 / Year)

1991-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004698>

フィリピン，インドネシア，エイズ事情

中島成久

はじめに

私は1989年12月19日から1990年2月19日までの2ヶ月間、フィリピン、インドネシアを調査旅行する機会に恵まれた。フィリピンには12月19日に着いて、1月3日にジャカルタに移ったので丁度2週間滞在した。今回の調査旅行の目的は二つあった。一つはインドネシアのジョクジャカルタで、スルタンIV世の死をめぐるディスコース分析をすることである。この研究の日本国内での経費については、1989年度法政大学学内助成金による資金援助（研究題目：死のメディア・ポリティックス）を受けている。もう一つの目的は、東南アジアにおけるエイズの流行と、それをめぐるディスコースの問題に関する予備調査を行なうことであった。

1990年前半現在エイズ患者は全世界で約100万、感染者が500～600万人と推定されているが、今世紀末には患者数で600～800万人、感染者はなんと2000万人に達すると予想されている¹⁾。現在エイズはアメリカとアフリカ諸国で爆発的に流行しているが、東南アジアにおいても、既にタイでは患者数が1万人を越え、社会的な大問題になっている。私はこれからフィリピン、インドネシアでのエイズ事情を取り上げるが、一口にエイズといっても、その国その国によって実態が大きく異なることをこの予備調査で確認した。

エイズは1981年にロスアンジェルス男性同性愛受刑者のなかから初めて発見された。それ以来エイズと男性同性愛は不可分のものとして理解されすぎている。エイズは聖書の教えに背く同性愛のもたらした、恐るべき病いと理解されたのである。だが基本的には、エイズは人間の体液を媒介にして感染する。だから男性同性愛者の同性愛行為以外にも、異性間性交でも感染する可能性はある。また麻薬常習者の注射針によっても感染する。更に現在では胎児感染も深刻になっている。

日本では現在までのエイズ患者の過半数は、輸入血液製剤を使用した血友病

患者である。現在エイズに感染した血友病患者が東京と大阪で製薬会社と国の責任を追及する訴訟をおこしているが、わずかな例外を除いては、訴訟の表舞台に登場することができないという異常な状況である²⁾。厚生省は1990年4月30日現在日本のエイズ患者は193人、感染者は1,188人と発表した。八王子保健所の遠藤医博の話によると、最近の日本の統計には血友病患者のエイズ感染を含めなくなったので、却ってその実態が分からなくなってきたという。

タイでは1989年11月15日現在、エイズ患者は11,936人（そのうち男性が88%）とエイズが爆発的に流行している³⁾。これはタイにおける売買春と麻薬の問題がその大きな原因である。タイの産業に占めるセックス産業の占める位置は大きく、日本からのセックス・ツアーが問題にされてから久しい。エイズは潜伏期間が長いので、そのうち日本でもタイで買春をした男性のなかから大量のエイズ患者が出てくる恐れがある。またタイの山地民族が作っている麻薬もエイズ蔓延の元凶であると考えられる。

フィリピンでは1989年10月現在、エイズ患者28人、エイズの抗体陽性者146人という数字が公表されている。その数だけを見ればたいした問題ではないように見えるが、そこに潜む問題の詳細については後述する。フィリピンのエイズ問題はアメリカ軍の基地の存在と密接に結びついている。現在フィリピンに存在する米軍基地の借用期限が1992年に切れるため、その後の米軍基地の在り方が大きな政治的問題となっている。アキノ政権も基地全廃という民族主義的主張の高まりは無視しえない。かといってその政治的基盤を大きく米軍に依存している以上——それは1989年暮れのクーデターでよく示された——全面撤廃にはいかないだろう。そして早くも、基地周辺労働者（特に女性のセックス・ワーカーズ）から基地撤廃反対の声が上がっている⁴⁾。

インドネシアでは1989年7月1日現在、エイズで死亡した者3人（インドネシア一人、オランダ二人）、エイズ抗体陽性者7人という数しか報告されていない。その後エイズ患者の数が急速に増加しているという報告を聞かないから、インドネシアにおけるエイズ患者発生は異常なくらい低いといえる。このこと自体は喜ばしいのであるが、そこにもいくつかの問題が存在するようだ。インドネシアは非常に報道統制の強い国でエイズ問題でもそれははっきりと現われている。1987年初めてエイズ患者が発生すると、インドネシア人患者のことはまったく報道せず、同性愛オランダ人の死亡を徹底的に利用し、エイズ・イコール・同性愛という図式を喧伝している。ただインドネシアは麻薬の流行を徹底的に取り締まってきたので、麻薬常習者のエイズ感染というケースがほぼ零であることは事実だと思える。

基地の町、オロンガボ

私がオロンガボを訪ねることにしたのは、私の友人であるプリセリーナ・パタホ・レガスト、フィリピン大学助教授のお父さんに勧められたからである。パタホさんはマルコスの同級生で、1939年弁護士資格を得た。1939年の弁護士資格試験ではマルコス元大統領が首席であったが、パタホさんも第7位の好成績で、そのときの新聞記事の切り抜きを今でも額に入れて持っていた。パタホさんは日本のフィリピン占領末期、マルコスとともにゲリラとして活動した。このフィリピン大学法学部1939年世代は、マルコス時代にフィリピンの要職を独占した。パタホさんもマルコス時代にフィリピン最高裁判事を努めた人で、今では判事はやめて普通の弁護士として活動している。私がフィリピンの日本占領という事実に対する天皇ヒロヒトの戦争責任について質問したら、言下に否定した。「戦争責任は先勝国が負けた側に要求するものだから、もし日本が勝っていたなら、日本はルーズベルト、チャーチルの戦争責任を追及していたであろう」と答えた。マルコスの評価もそれと同じで、「時代が変わればマルコスも復権されるであろう」と述べた。そのほかに私は、日本の経済進出、ジャバ行きの問題を尋ねた。日本の経済援助については、現在大阪を中心に医療チェーン店を運営している徳洲会が、日本で古くなった医療器具をフィリピンで再利用しようとして、その法的相談にのっている最中だという。一つの問題は、日本で古くなった器具でもフィリピンで使うためにはその器具を使える技師と看護婦が必要になり、さらに彼等を教育する学校がいるとなってくるので、大計画にならざるをえなくなるということだ。援助をするにも相手国の技術水準、教育水準をよく考えないとならないということだろう。そしてエイズの問題へと私の質問は進んでゆくのであるが、即座に氏はオロンガボを訪れることを私に勧めてくれた。オロンガボには極東最大のスーヴィック海軍基地があり、フィリピンにおける米軍基地、基地経済、売買春、そしてエイズの問題を考えるのに最適の町であるからだ。

オロンガボには、フィリピン大学に長期に留学している穴田久美子さんに案内役をお願いし、そのほかに草の根貿易の吉田さんご夫妻らも参加した。1989年12月29日から翌日の夜までの一泊二日は、私のフィリピン滞在でもっとも収穫の多いツアーであった。

オロンガボはマニラのカロオカンから、急行バスで北に3時間の町である。



写真 I スーヴィック米海軍基地。背景の山の向うまで米軍の所有地。



写真 II 腕の入れ墨を誇示する若い米兵。

人口約30万のこの町は、天然の要塞であるスーヴィック湾の奥にひかえる広大な米海軍スーヴィック基地を支える（あるいは基地に支えられた）町である。19世紀の終わりにスペインの手によってここに軍港が築かれて以来、アメリカ統治下の元で軍事基地としての地位を第二次世界大戦、ベトナム戦争と経るごとに高め、今ではグアム、沖縄と並ぶ米大七艦隊の最大の拠点である。翌30日にスーヴィック海軍基地を一望できるカトリック基地まで行って驚いた。スーヴィック湾の一角のオロンガボ市を取り囲む広大な土地とその後輩地がすべて米軍の基地である。ゲリラ戦などあらゆる作戦が演習できるこの基地では、日本の自衛隊も時々演習をやっているとのことである。

夕方着いた我々の基地との最初の出会いは、湾の一角を埋め立てた基地のゲートに通ずる橋を、夕方の勤務を終えて出てくる現地人労働者の光景であった。港湾施設を中心としたその埋め立て地には、米兵のための大学まである。一人一人通行証を見せながらその橋を通過するその姿は、やはり異様なものであった。一世紀近くの軍港としての歴史があるこの町であるが、「オロンガボ市が米兵相手の売春の町として発達するのは、ベトナム戦争以来」⁵⁾とのことである。米兵の「休養と保養」の施設としての要請が急上昇したのである。

夕食のあとある生バンド・クラブを覗いてみた。だだっぴろいホールの中心に踊り場があり、それを取り巻くように多数のテーブルがあり、女の子達が三々五々客を待っている。この日は米軍の船が入っていないので、店は客が少なく活気がない。米軍の大きな船が入ったときは、8,000人を越すといわれる女の子（売春婦）が足りなくなるといわれている。この店に坐って見てもあまり収穫がないので、ディスコに行く。ここはおもしろかった。水着姿の何人もの女性がいくつかのステージで踊っていた。トップレスは最近禁止されたそうだが、ハイレグの水着で、時々客を挑発するような仕草をしていた。踊っている女の子は20~30分交代で踊る。そうしないと体力が持たないからである。この店の面白さは中央のディスコの踊り場にある。ディスコを踊っている人がまぢまぢなのだ。踊りながら客を探しているそのでの女性（彼等はこの店の女性なのかそれともほかからやってきたのか）、恋人同士（といっても米兵との即席のカップル、あるいは米兵のオンリーさん）、あるいは休暇なのか、女性同士で純粋に踊りを楽しんでいる人達、それに女の子を探しにきた米兵などなど。更に店の中には、女性米兵の相手を努めるフィリピン男性ホストの顔も少し見られる。

そのあととても面白い店に行った。米兵が何人もたむろしているのだから

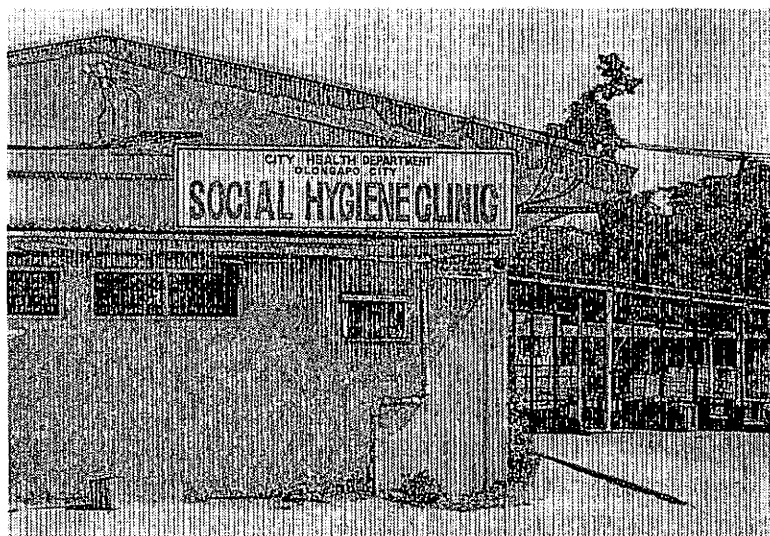
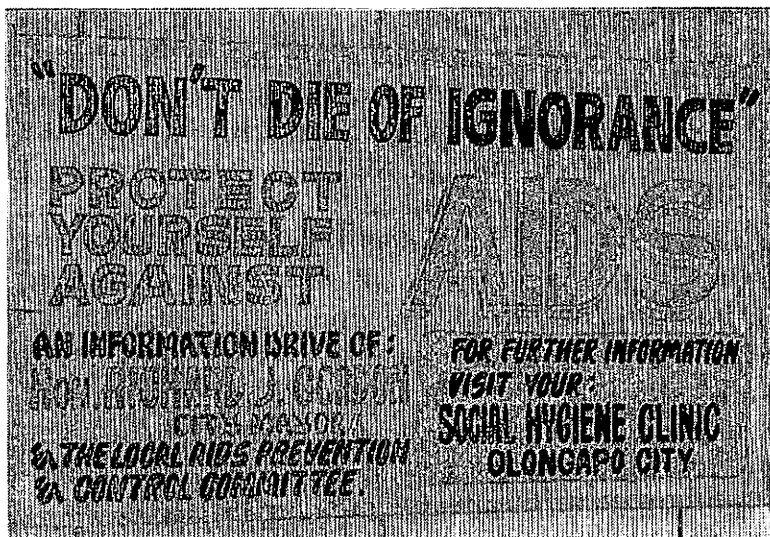


写真 III・IV “Don't Die of Ignorance”（無知のため死ぬ）という看板のかかった、オロンガポ市社会衛生センター。

入ったが、その店の面白さはその店の値段の安さばかりではない。表通りからは道よりも一段低くなった店の客が通りを思案顔に眺めているのが覗けるのであるが、店の中からは表通りの通行人をまるで回舞台のように鑑賞できるわけだ。一見粗雑なこの店にこのようなさえた仕掛けがあるのは驚きだ。それに天井が面白い。米軍の種々のスローガンをタイルのように描いた絵がたくさんはめられているが、単純に米軍礼賛でなく、相当な皮肉もありこれもまた面白かった。

翌12月30日の朝食後、穴田さんの知り合いの女性（後述するタマラ）の案内でオロンガボの「公衆衛生センター」(Social Hygiene Center)を訪ねた。正門を入ったすぐの建物の壁に、“Don't Die of Ignorgance!”（無知のため死ぬな）という大きな看板が目にとびこんだ。我々が訪ねたのは土曜日であったのでセンターのなかは閑散としていたが、このセンターではウィークデイにピンク・カードの証明を出している。フィリピンで性産業につくためには、性病にかかっていないという証明書が義務づけられている。しかもそれは女の子の個人負担でやらないとならない。更に、米軍とフィリピン政府が資金を出して、ここで性産業に従事している約8,000人の女性のエイズ感染調査を毎年実施している。タマラの話では、エイズの検査でポジティブだと分かると隔離されるという。エイズ陽性者と分かった女の子にお金まで与えてその政策を実施しているとのことであるが、日本で聞いた情報とは全然違う。翻訳家柳沢山美子さんの話だと、そうした女性は逃げて、また他の所で客を取るとのことだった。

二人の性労働者のライフ・ヒストリー

私を知ることでできた二人のセックス・ワーカーズ（オロンガボのタマラ、マニラのルーシー）のライフ・ヒストリーを紹介する。この二人は穴田さんの知り合いであり、彼女の協力なしには以下の情報は得られなかったであろう。なおここで使用する名前は仮名。

二人のケースはフィリピンではきわめて普通のものである。むしろタマラの場合は結末がハッピーエンドになることで、非常に恵まれているといえよう。二人とも幸い今のところエイズに感染してはいないが、感染の危険は常にある。日本でお金を稼ぎたいというルーシーのジャバ行きへの希望は信じられないくらい強く、ジャバ行きの実態がフィリピン人のあいだにあまりにも理解さ

れていないのに暗澹たる思いがした。

20代後半から30代前半と思われるタマラは、黒人米兵のオンリーとなり、3年前に彼の子供（女兒）を産んだ。彼はその後各地を転々とした。最初の3ヶ月は手紙をくれたが、だんだん手紙がこなくなり、自分も彼のことはあきらめてしまった。これから彼等の交流は数年跡絶える。彼は退役後ロスの病院の事務職として就職していた。タマラにも新しい恋人ができていたが、その前に子供の写真を彼の実家に送っていたのである。その写真がロスで働いていた彼の許に届けられて、彼は娘の成長を知り、二人をアメリカに引き取りたいといい、ヴィザの取得、渡航費などすべての費用を負担して二人を呼ぼうとしている。

タマラの新しい恋人も彼のことはよく知っていて、タマラが子供を連れてアメリカに行くことにすぐ同意した。ただその子供がなかなか人になれず、離婚歴三回、「女性には家庭に留まり家事・育児に専念すべきだ」との信念を持つテレサの新しい恋人になれるまで2週間かかったそうである。我々にもなかなか人になれず、その人間（男性？）不信は相当なものである。だからこの点が心配である。晴れて父親と対面し、親子水いらずの生活が始まっても、うまくやっていけるかどうか不安が残る。ちなみにタマラの今の恋人は、スーヴィック湾の最奥の海岸のきれいな所にバンガローを購入し、来年からそこの経営に乗り出そうとしている。

ルーシーは今マニラの繁華街のある店で、女の子達のマネージャー役として働いている。セブ島出身、30歳。5人の子供がいるが、5人の子供はすべて別々の男性とのあいだに生まれた子供である。（ただ実際は7人の子供がいたが、二人は死亡）。一人の女の子（4歳）は目が見えず、耳も聞こえないらしく、話すことができない。今はある年下の男性と一緒に住んでいるが、彼とはうまくいっていないので別れたがっている。もう客を取れるほどの体型でも、年齢でもないのに、店で女の子の面倒を見ている。この仕事は女の子に人望がないとできないとのことである。将来はママさんになるのが夢である。日本人が好きで、「日本に行かないか」と日本人に言われることがよくあると言う。我々はそれを客の冗談かお世辞だと思ったが、彼女はそれを本気にして、「どうしたら日本に行けるのか」と、我々にしきりに尋ねてきた。いわゆるジャパ行きさんが日本でどういう待遇を受けているかについて全然知らない。日本に行けば大金が稼げる、素晴らしい生活ができると本当に信じている。

ルーシーと30分話したあと彼女のお店に行く。5m×20m余りの広さのそ

の店には三つのステージがある。両サイドに客の坐るテーブル、カウンタがあり、それぞれのステージでは超ハイ・レグ（トップレスではない）の若い女の子がハード・ビートの曲にあわせて踊っている。それはお世辞にもうまいとはいえない踊りであって、いかにも山出しの女の子といった感じである。店には100人の女の子が働いていて、今夜はその半分しか働いていないという。2～30分ごとに交代で踊り、踊っていないときは休んだり、サイドで客を待っている。店のママの話しによれば、女の子を連れ出す場合には店に600ペソ（1ペソ約7円）、ショートで800ペソ、泊りで1,400ペソ以上が必要とのこと。日本人観光客のなかには一人で3人も女の子を同時に買う者もいるとのことであるが、欧米人の場合には数日間の契約で遠くのバンガローにでかける場合が多いとのことである。遊びの仕方にも日本人は札束をきり、余裕がないということか。

私が2週間厄介になったプリセリーナの家のお手伝いさんのコーラの話によると、高卒直後の8年前親戚の伝でこの家にやってきた彼女の一ヶ月の給料は600ペソ。クリスマスのあと突然やめたジョシは、この仕事を初めてわずか4ヶ月目だったので450ペソの月給だった。食費と住居費は要らないとはいえ、朝早くから夜遅くまでこき使われてこれだけの収入しかないのだから、一部の高給プロスティテュートの収入がどれだけ良いかわかるだろう。

アドゥル・デ・レオンとのインタビュー

1月2日の午後フィリピンの各種女性団体の統合組織として女性の権利の擁護のために闘っている、ガブリエラの副代表のアドゥル・デ・レオン（Adul de Leon）さんに会えた。初老の知的な女優で、これまで会ったフィリピン人の中で最も印象ぶかい人で、興味ぶかいインタビューができた。インタビューはフィリピン大学近くの、とあるレストランで客の少ない午後4時から行なわれた。

彼女はまず1989年10月現在の、エイズに関する統計から示してくれた。それによるとエイズ患者は28人、抗体陽性者は146人である。その内訳は、殆どが米軍基地周辺の性産業従事者であり、残りが帰国した移民とか、家庭の主婦があげられている。一見すると数的には、非常に少ないようであるが、問題がある。まず、これまで約25パーセントの性産業従事者のエイズ検査しか終わっておらず、単純に計算すると、100人以上の患者と500人の抗体保持者がいること



写真 V ガブリエラ副代表, アドゥル・デ・レオン。

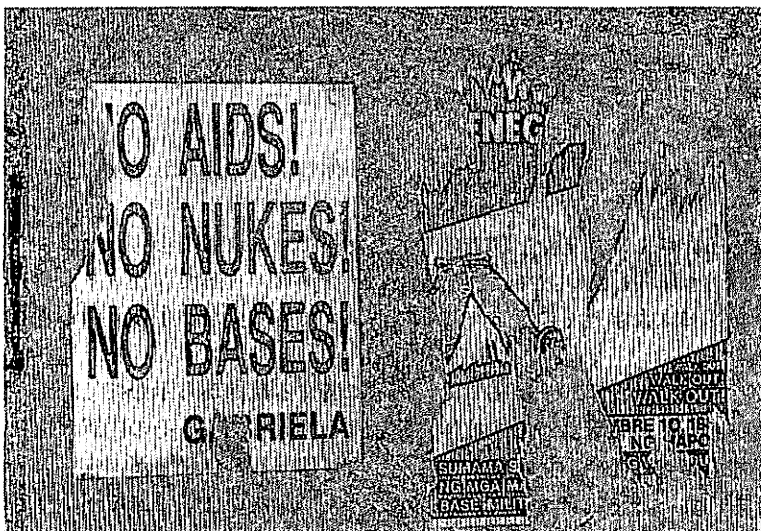


写真 VI 「反エイズ, 反核, 反基地」を訴えるガブリエラの宣伝ポスター。

になり、日本とはほぼ同じ数になってしまう。フィリピンでは血液製剤による感染者はいないので、米軍基地の存在とエイズの流行という図式が際立ってくる。

第二の問題は、そうして発見された患者あるいは抗体保持者は、当局の警告を無視して別の地域に逃げて、そこでまた売春をしているということである。米軍側は性産業従事者に、性病、エイズに感染していないという証明（ピンク・カード）を求めている、一旦その証明を得られないと分かったら、生きてゆけなくなるからである。私がオロンガポで聞いたように、政府側はいわば休業保障を行なっているとのことだが、それはまったく効果は上がっていない。アドゥルさんに「キューバではエイズ患者はサナトウリアムに隔離されている」⁶⁾と話したら、「それはよいことだ」と言ったのには驚いた。キューバ方式が人権を全く無視して、強硬にエイズの封じ込めをはかっているのもおおいに問題であるが、患者が政府の手の届かない所に雲隠れしてしまうフィリピンもこれまた問題である。それだけエイズの蔓延する危険性が高いからである。

ガブリエラは現在、売春婦だけに要求されているピンク・カードを米兵にも要求している。フィリピンのエイズは殆ど米兵をとうして持ちこまれたものである。だから米兵のエイズチェックもやらないと、フィリピンのエイズ感染者は増え続けることになる。更に彼等は、エイズ蔓延の損害補償を求めて、在比米軍に集団訴訟を起こそうとしている。

フィリピンにおける売春婦のリクルートだが、基本的には経済問題であるが、この国で大きな影響力をもっているカトリックがいまだに処女性を強調していることとも関係ある。非処女になると社会的地位がものすごく低くなり、一度恋愛に敗れた女性はまともな人生をおくれなくなる。そうした女性が売春婦の予備軍となる。

以下は彼女との一問一答（を整理したもの）である。

——：女性を売春においやる最大の理由は何でしょうか？

アドゥル：売春以外に仕事がないからです。フィリピンの経済は現在非常に悪いので、地方から出てきた非熟練労働者には、メイド、訪問販売員、店員などの仕事しかないのです。工場労働者のような特別な技能を必要とする仕事は彼らにはありません。そうした仕事は通常賃金が非常に低いので、次第に彼等は売春の道にはいつてしまいます。そして一旦売春の仕事を始めると、もうそれから抜け出すことはできなくなります。売春以外で彼等が必要としているお

金を稼げなくなるからです。

—：売春をやる前に性的な体験があるのでしょうか？

「時には処女のまま売春を始める女性もいます。しかし大多数は性的な経験があります。フィリピンでは今だに処女性が重要視されています。一度処女性を失うと、女性として低くみられ、もう結婚をすることが難しくなります。いい男性を探すのができなくなるのです。それがこの国の文化なのです。」

—：バージンは高く売れるのでしょうか？

「はい、特に中国人が処女を高く買いたがります。」

—：中国人ですか。日本人ではないのですか？

「中国人だといわれています。少なくとも外国人です。処女の値段は高いのです。お金のために処女の娘を売り出す家族もなかにはあります。更に児童売春の例もあります。フィリピンはカトリックの国ですから、タイにおけるような頻度でそうしたことが行なわれているとは思いません。児童売春は場合によっては、7歳ぐらいからあります。この国では21歳以下は大人ではありませんから、それ以下の場合すべて child prostitute と呼んでいいのです。マニラだけで500例の児童売春があるといわれています。」

—：エイズ予防のためにはコンドームの使用が有効だといわれていますが、いかがでしょうか？

「フィリピンにはたくさんの売春婦がいます。だから彼女らは客の獲得をめぐって競争関係にあります。もしコンドームを使えば顧客を失う恐れがあります。オロンガボは船が入ったときだけ客が取れるのです。船が入るのは月に5～6回ぐらいです。エイズ予防のためにはコンドームの使用が有効なのは認めますが、それを普及するためには、売春婦をもっと教育し、エイズの怖さを彼等に教える必要があります。」

—：そうした目的のためにいい方策はあるのでしょうか？

「我々は政府の補助を受けていない民間団体です。そうした売春婦の教育は本来政府の仕事です。我々はそうした運動を推進する用意はありますが、我々は資金が不足しています。政府が何もしないから我々がしなければならぬのですが、資金がありません。」

—：ガブリエラの資金的基盤はどうしていますか？

「我々は色々なプロジェクトを企画し、それを下部団体に分担させることにより、資金を得ています。彼等は我々の事務所代、コンピューター、タイプライター代などの資金を負担してくれません。だから我々は、我々の企画する

プロジェクトを“売りに”出すのです。」

—：政府のエイズ流行に対する意見はどうでしょうか？

「政府はエイズの原因として、売春婦の米兵からの感染を認めていません。彼等はまだ同性愛者の検査をしていないから何ともいえないと言っています。勿論、同性愛者の検査をしたら、もっと多数のエイズ患者が発見されると思います。」

—：誰がエイズ検査の費用を負担していますか？

「政府と米軍です。検査はこれまでのところただ米軍基地周辺で行なわれたにすぎません。勿論その検査は、フィリピン人のためではなく、アメリカ人のために行なわれたものと思います。」

—：それに対抗するために、米兵にもエイズ検査を要求しているのですね。

「はい。米兵がわれわれにピンクカードを要求するのなら、われわれもそれを米兵に要求する権利があると思います。1986年からわれわれはこのキャンペーンを始めましたが、これまでのところおもわしい成果を上げていません。そのうちに米軍基地にデモをしてこの要求を貫徹するでしょう。そして米兵によりエイズに感染した女性の補償を求めて、集団訴訟も考えているのです。」

ガブリエラ

私はガブリエラのいくつかの反エイズ・反性暴力キャンペーンのパンフレットを手に入れることができた。そうしたパンフレットを通してガブリエラが何を訴え、何と闘っているのかが理解される。ここではその大略を紹介することにとどめる。

“AIDS is here! Fight AIDS” (Women Against AIDS Campaign) Status Report August 7, 1986-January 31, 1987.

4回の会議、集会を通して、エイズの問題が基地問題であることを強調。そしてフィリピンの保健、観光、外務の各省に対して、エイズ対策の特別なガイドラインの設定を要求した。またワインバーガー国防長官など米国防、教育・保健各大臣に、エイズ対策の資金援助を訴える。米国は資金援助は断わったものの、医療技術をフィリピン保健省に提供することを約束した。

“AIDS is here! Fight AIDS”(Women Against AIDS Campaign) March 23, 87.

ザ・マニラ・タイムズの1987年2月28日号の記事は、41人のエイズ抗体陽性者（うち男性はたった1名）がいることを報じた。そしてそのうちの35人は、クラーク、スーヴィック、ウォーレス米軍基地周辺のバーで働く“entertainers”であることを明らかにした。これから分かることは、フィリピンのエイズが米軍基地を通して広まったものであることだ。エイズは現在のところ治療不可能な病であり、フィリピン人の健康を不安におとしいれている。政府の緊急の対策を要求する。

更にフィリピン政府が一人のジャバ行きさんのエイズ感染の事実を日本政府に伝え、公表させたことは、「魔女狩り」として激しく批判されるべきだ。（このことが、日本で最初のエイズ騒動として、松本市周辺の住民をパニックにおとしいれたことは我々の記憶に新しい。）そうした行政権の不法な使用は、女性をエイズ媒介の“源泉”として特徴づけるものである。問題は一体誰がフィリピンにエイズをもたらしたかであり、売春婦を危険なものとして攻撃するのは原因と結果を逆転させ、真の被害者を加害者として差別したものである。

“A Situationer, Philosophy and Program of Action of Gabriela's Commission on Violence Against Women's Work on Prostitution” May, 1987.

これはフィリピンにおける売買春の実態と、それに対する処方論の理論的根拠を求めた16ページに及ぶ詳細かつ力の入った報告書である。

報告書はまずガブリエラの過去の活動をふりかえったあと、1965年の改訂刑法で、売春が公衆道徳に反する罪として規定されていることに注目する。そしてフィリピンにおける売春地域として、都市における赤線、観光地、米軍基地をあげる。そこでは女性がコールガール、バーガールとして売春が日常的に行なわれているが、そのほかに半ば地下組織の売春宿があげられる。最後の売春宿の実態はまだ殆ど分かっていない。そこに連れてこられる女性の殆どは、強姦や、児童売春などの不法行為を受けており、また劣悪な環境にいる。そしてこの20年間フィリピンは、性の輸出国としての性格を強めていると指摘している。

次に売春の原因として、基本的には貧しい経済にその原因があるが、社会・文化的及び宗教的な原因も強く認められる。社会・文化的要因として、貧しい

経済環境のなかで十分な教育を受けられず、非熟練部門の労働現場においてしばしば、男性雇用者のセクシュアル・ハラスメントの犠牲にされる。下位労働者の間では、「一度泥にまみれたら、泥のなかに留まるのがいい」という諦感があり、たとえ強姦により処女を失っても、その犠牲者の方に非はあるとされていく。またフィリピンの宗教（カトリック）は「良い性」と「悪い性」を峻別し、「良い性」とは教会の認める性モラル（一夫一婦制）を厳守することであり、「悪い性」とはその規範以外のすべての性のことで罪である。こうした女性の性の二分法は、男性による女性の支配を容易にする。

更に報告書は売春の制度化される要因の分析も行なっている。売春に従事し、「悪い性」を担う罪ある女性は、次第に自己評価を低くし、そこから抜け出るあらゆる希望をなくしてしまう。オロンガボの性労働者の唯一の希望は、「水兵と結婚し、自分の過去を消してくれる土地に行くこと」である。政府は口先では売春を禁じ売春婦の存在を認めていないが、売春が実際に行なわれている事実から収入を得ている。売春婦をバー、キャバレー、クラブ、ディスコ、マッサージ・パーラーなどの従業員とみなし、税金を徴収している。だが彼等がそうした職場で、法の要求している取り扱いを受けているかどうかにはまったく関心を持たない。対外的な問題として、基地の存在と売春は不可分の問題である。米兵の「休養と保養」のために基地周辺の歓楽街は存在し、そこでは米軍をたたえるシャツなどが売られている。そうした地域を支配するのは男の論理と暴力である。オロンガボで最も人気のあるショウは、女ボクシングである。そこでは血をみるまで殴りあわされ、勝った者だけが賞金をもらう。そのショウの時は店は客で溢れ、女の子を連れ出す率も高くなる。また米兵の人種主義も問題である。彼等はフィリピン女性を「エキゾチック、情熱的、可愛い、従順」だと見なしており、しばしば“LBFMs”（Little Brown Fuking Machines）と呼んでいる。米軍にとって基本的にフィリピン女性は、安上がりですむのである。そうした歓楽施設が、なぜ米本土ではなく、フィリピンにあるかという点、帝国主義的世界支配の結果である。アジア人女性を性取りひきの対象とすること、男の支配による結婚斡旋、セックスツアーなどすべて資本、価値、人種主義による低開発国の支配の現われである。

売春は売春婦個人のみならず、フィリピン全体に大きな影響を及ぼしている。常に競争関係にあり、男性の論理、暴力にさらされている売春婦には共通に、反社会的行為（嘘をつく、窃盗、アルコール依存、暴力）がみられる。また自己破壊の極端なものとして、薬物利用、自殺などがあげられる。売春はフ

ィリピン全体の経済発展には殆ど寄与しない。それどころか性病、エイズ、性暴力の容認など深刻な社会問題をもたらしている。

報告書は最後にそうした問題に対する女性団体の活動の特徴と活動のマニュアルを提起しているが、ここでは省略する。

ジョクジャにおける売春の実態

1月3日にジャカルタに着いた私は、京大東南アジア研究センタージャカルタ事務所に駐在していた西村さんから、トヨタ財団から資金を得てジャワの売買春の研究をしている、ガジャマダ大学のクンチョロ氏のことを紹介された。1月13日に彼と連絡が取れて、会うことができた。精力的な感じのするジャワ人で、社会心理学を専攻している。彼は売春をやるきっかけは経済的要因ではなく、むしろ文化的要因、つまり売春を容認する環境であるという仮説を、いくつかの比較研究で明らかにしている。売春を拒否する村では、売春をやるよりも、乞食になったほうがましだという考え方がある。エイズの問題にはまだ関心がなかったが、今‘Kawin Kontra’（直訳すれば契約婚であるが、主に日系企業の現地妻）の研究をしているという。私はクンチョロの案内で2回、ジョクジャの売春婦の実態を知る機会に恵まれた。そのインタビューは雨期の豪雨のなかで、時には明け方まで続いた。クンチョロはインドネシア人には珍しく時間に正確な男で、どんなに雨が激しく降っていても、約束の時間には車で迎えに来てくれた。またクンチョロはジョクジャの王宮の人間関係にも明るく、私が新スルタン（スルタンX世）の腹違いの弟のハディクスモに会うことができたのも彼のおかげである。

1月14日の夜、ジョクジャ南の州政府公営の売春街に行く。政府公営の売春街では、性病の子防のために毎週注射をしている。ジョクジャでは公営売春以外にも、いくつかの売買春宿があり、そういうところでは性病予防のための処置は殆ど取られていない。インドネシアでも地域によっては売買春が禁止されている。西スマトラでは、隠れて売春をやった女性をサナトリウムに収容して、再教育してから、自立への道を教えている。

まず東ジャワのパニユワンギからきた女性にインタビューした。ここにパニユワンギ出身者は3～4人いるといい、ここには友達を頼って来たとのことである。こうした形での売春婦のリクルートは非常に多い。この売買春街には10数軒の売春宿があり、一つの家にも二畳程度の広さのいくつかの部屋があり、

通常各部屋に一人女の子がいる。客があるとその家のマスターに、客一人あたり2,000ルピア（1ルピア約12円）払わないとならないという。彼女は23歳、17歳で25歳の男性と結婚し一児を設けたが、夫が暴力をふるうので離婚した。彼女の話しでは、年が違い過ぎるので合わなかったという。子供は親に預けて、ジョクジャの店で働くと言ってここに来た。だから両親は彼女が実際ジョクジャで何をやっているか知らないと言っているが、クンチョロの話しではバニウワンギ出身者が何人もいるので、おそらく知っているだろうとのことである。彼女はこの仕事は好きでない、と言っていた。男が女を選ぶので、選ばれなかった時の心理的葛藤が大きい。この日は日曜であったが雨が激しく降るので、不断の日に比べれば客が少ないとのことである。

避妊のための薬を使っているが、コンドームは客の要求がない限り使わない。ある女性は客（特定できない）の子供ができ、産んで育てている。

インドネシアでは中絶は禁止されているので、中絶を望めばドククン（呪医）に頼るしかない。これはフィリピンでも同じである。そして時々妊婦の生命が危うくなる⁷⁾。

エイズに関する知識は一応あったが、その怖さは殆ど知っていなかった。そして何の予防法も取っていない。クンチョロの話しでは、字の読める売春婦が半分以下であるため情報源としての新聞、雑誌が殆ど役にたっていないという。彼等の教育水準は大多数がSD（小学校）卒で、SMP（中学校）卒も少しはいる。一人SMA（高校）出身者がいた。

スダ出身の37歳の女性は、夫がギャンブル狂だったために離婚し、今ここにいるという。まだ数ヶ月しか売春の経験はない。年齢的にたくさんの客がつくわけではないが、まだ十分魅力的である。どうもレズビアン⁸⁾の経験があるようだったのでストレートにきいてみたら、2回あると言う。相手は男にひどい目にあった友達だという。

クンチョロ氏の関心をもつ‘Kawin Kontra’の経験のある女性もいた。相手は中ジャワのマディウンの高速道路建設をしていた日本人で、月に30万ルピア（約29,000）円貰っていたという。この金額は普通のインドネシア人の平均月収よりもはるかに良い。契約終了後、彼は彼女を日本に連れて帰りたかったそうであるが、日本での生活に不安を感じて、彼女のほうがオーケーしなかったと言っていた。

1月18日の夜も売春婦とのインタビューをすることができた。タマン・シスワの創設者デワントロの墓のすぐ裏のあばら屋の中で、数人の女性が客を待っ

ていた。彼等は30歳以上、中には40歳、50歳以上の女性もいた。ここで客をまつ女性は年齢やその他の理由で、ほかの所で稼げないので、こうした「非合法」な売春をしているのである。非合法というのは性病検査を義務づけられていないことであり、そうした女性の衛生観念は非常に低い。

以下は、ソロとクラテンの中間の村出身の女性とのインタビューである。

17歳で3歳上の男性と結婚し、二人の子供を作った。夫は女好きで、自分は4人目の彼の妻だった。夫に新しい女ができたので自分のほうから離婚を要求した。その女は夫の職場の同僚だった。自分はとてもかなわないと思ったので離婚を決意したという。最初は市場で豆腐を売っていたが、友達の勧めで客をひろうようになった。子供の面倒は、近くの家で両親がやっている。公娼街は女が一杯で、今は“*No Licence*”で客を拾っている。客は中国人の男性（特に商店経営者）が多いという。なぜ中国人が多いのかと尋ねたら、「かれらはお金持ちだから」と答えていた。避妊法としては、薬局でピルを買って飲んでいる。コンドームは使っていない。コンドームが避妊だけではなくて、性病予防に役立っていることは知っていなかった。一度明らかに性病にかかっている男性客があり、慌てて逃げ返ったとのこと。エイズについては新聞とかで知っているが、よく分からないという。一度かかると3日で死ぬとかいっていた。

インドネシアのエイズ報道

1987年初めてオランダ人男性同性愛者がバリで死亡して以来、インドネシアの報道機関は、エイズは常に外国人により、しかも男性同性愛・両性愛者によってもたらされると伝えている。だから現在のインドネシアで最もエイズ流行の危険性があると思われるのは、バリ島などの観光地における売買春を通してであるとされている。インドネシアを代表する高級週刊誌の「テンポ」に最初のエイズ特集報道が現われたのは、1987年4月5日にオランダ出身の男性同性愛者が、デンパッサールの病院で死亡した時である⁸⁾。それ以前に一人のインドネシア人がエイズで死亡したとされているが、その人物の性別も、年齢も、どこでどのようにしてエイズに感染したかもまったく明らかにされていない。

同「テンポ」誌は、エイズで死亡したH氏の死亡時の写真を公表している。痩せこけ、目はくぼみ、体中にエイズ特有の黒いしみのできた、「外国人同性愛者」のむごいこの写真の公表は、エイズの抑制効果を狙ったものと思われるが、H氏の人権にはまったく配慮していない。

H氏は44歳であったが、10年前にグループ旅行で初めてインドネシアを訪れた。そしてもっとインドネシアを知るために、87年2月27日に、メダンに着いた。その後彼は、ジャカルタ、バンドン、ジョクジャカルタ、スラバヤを訪れている。そしてアンボンに渡り、長年彼の“恋人”であったオランダ生まれのS氏を訪ねた。H氏がエイズに感染したのは、S氏を通してであり、86年離婚した妻と二人の子供にもこの事実が知らされた。問題はメダンについてからアンボンを訪れるまでの1ヶ月に、H氏が他の人と性関係を持ったかどうかであるが、もしそうだとすると怖いことになる。はっきりしているのは、バリについてクタ海岸のSYSバンガローの18号室に泊り、そこでエイズが発病し、容体が急速に悪化したことである。H氏の“恋人”のS氏は救急車を呼び、H氏はサングラー病院に運ばれたのであった。サングラー病院は1985年以来エイズの文献研究を始めていて、氏がエイズに感染していることを確信し、血液をジャカルタにも送って確認を求めた。

「テンポ」は1989年7月にも保健省と共同で実施した、インドネシア人の性意識とエイズに関するアンケートの分析記事を載せている⁹⁾。それによると、半数以上が20歳までに性体験を持ち、男女とも婚姻外性交渉をかなりが経験（男59%、女38%）している。そして性のパートナーを変えることの危険性を強調している。また売春婦、同性愛者のエイズに対する知識（エイズの原因、症状など）が乏しいことが問題とされている。

インドネシアは同性愛に寛容な文化であるとよくいわれる。勿論イスラムの教義では許されていないが、土着の文化のなかでは、両性具有のイメージが重要な役割をはたしている。ジャワ文化における道化のスマールのことを考えて見ればよいだろう。ただそうした両性具有のイメージが、性関係における同性愛を意味していると即断してはならない。両性具有のイメージは、文化における対立する原理を統合するものである。ジャワ語でバンチ (banci) と呼ばれる女装した男性同性愛者が、夜の街を客を拾っているのを良く見かけるが、そうした人々とジャワ文化における両性具有のイメージは別者であると考えてよいだろう。

インドネシアでもエイズに関する関心は次第に高まってきている。私のインドネシア滞在中にジャカルタで、インドネシアを離れてからすぐの3月にソロで、それぞれエイズに関するセミナーが開かれたと聞く。その詳細はまだ明らかではないが、政府による情報統制の厳しいこの国において、エイズも国の情報操作の管轄下におかれようとしているおり、こうした地道な努力が少しでも

エイズに関する正しい知識の普及に寄与することを望まざるを得ない。

注

- 1) 「ニューズウィーク」(日本版) 1990年7月5日号。
- 2) 朝日新聞, 1989年10月28日号。
- 3) 朝日新聞, 1989年11月24日号。
- 4) Asahi Evening News, 1990年5月16日号。
- 5) 伊従直子「アジアの片隅から」『アジアから来た出稼ぎ労働者たち』(内海愛子, 松井やより編) 明石書店, 1988。
- 6) 「ニューズ・ウィーク」(日本版), 1989年7月27日号。
- 7) インドネシアの家族計画は今やかなりの程度成功しているという。私は1990年の夏スマトラの各地を訪れたが、ニマス島の伝統的な村落の家族計画の実態を知ることができた。そこで取られる避妊法は、IUD(子宮内避妊器具), ピル, コンドームのほか、皮下植え込み法(ノアプラント), 注射などがある。使数されている避妊法の中ではIUD利用者が圧倒的に多く、次にピルと続く。コンドーム利用者は少ない。ノアプラントは合わない女性も結構いるらしく、これ以上妊娠を望まない女性には卵管切除手術も施される。その家族計画の推進の中心に、各村の村長がいる。ニマスの伝統的なロング・ハウスの村の村長の家の中には、家族計画の実施の詳細が、表(コンドーム, ピル, ノアプラントの普及などの数値)となって掲げられていた。【私のスマトラ訪問は、文部省海外科研「東南アジアにおける国民国家とエスニスティーとの係わりに関する文化人類学的研究」(代表綾部恒雄筑波大学教授)のインドネシア研究の一環としてなされた。】
- 8) Tempo, 1987年4月25日号。
- 9) Tempo, 1989年7月1日号。